

寄贈資料紹介

中之島図書館 大阪資料・古典籍課 佐藤 敏江

一 屏風 六曲二双

大阪府立中之島図書館では、東大阪病院名誉院長田中治・美譽子夫妻より寄贈された屏風三点を、二十年六月に公開した。公開用の調査資料をまとめ、中之島図書館所蔵の絵画の紹介とする。この屏風は小寺兼吉氏（元神戸市長）の所蔵であったが、弟の小寺又吉夫妻に贈られ、又吉夫妻から縁続きの田中夫妻に贈られたとの事である。

一 篠崎小竹筆「頼山陽詩屏風」

六曲二双（本体：一六三×三六〇 詩：一三四×五五・五）

落款類：小竹斎楯田印 篠崎弼方印・承弼方印 末尾に「頼子成詩六首 七十小竹老人書」

「頼山陽詩六章 小竹七十老人書」



篠崎小竹が親交のあった頼山陽の漢詩（左記）十二首を揮毫した作品。

「頼山陽漢詩」

五月十四日飲夢于上村太壽宅務（山陽詩鈔卷三）

把万盃竹底意陶然 正是晴暈竹醉天

竹已醒時人卻醉 竹風呼起醉人眠

五月十四日飲夢于上村太壽宅務（山陽詩鈔卷三）

把万盃竹底意陶然正是晴暈

竹醉天竹已醒時人却醉

竹風呼起醉人眠

題夢自畫山水務（山陽詩鈔卷三）

収夢拾雲煙務寄夢戲嬉務峰巒滿

幅墨淋漓休万嫌点染欠夢妍麗務

免万被無人呼夢做畫師務

入夢豊前務過夢耶馬深務遂訪夢雲覚師務共再遊焉遇万雨有万記又得

夢八絶句務 〔の内〕 (山陽詩鈔卷四)

山履何辭泥路新天将夢变套務

待夢遊人務群峰得夢雨如夢龍鬪務

隱躍雲間見夢爪鱗務

舟中逢夢立春務 二首〔の内〕 (山陽詩鈔卷四)

擬未與夢飛鴻務争味後先蔓北帰萬里

説夢春煙務行帆背指豊山雪歴

々游謀已隔万年

芳山 (山陽詩鈔卷五)

侍万輿百里度夢嶙峋務花落南山

萬緑新筍蔽侑万酒山館夕

慈顔自有夢十分春務

在万備題夢山水圖務 (山陽詩鈔卷五)

雲光打万水々揺万欄滿紙烟波

墨未万乾吾亦有万樓鳧水上

秋来名月附万誰看

頼子成詩六首 七十小竹老人書 篠崎弼印 承弼

湖夢泰水務 (山陽詩鈔卷五)

山彎疑到夢水窮處務岸豁還逢

人住郷竹翠沙明家八九門

々魚網曬夢斜陽務

鴨川寓居雜詩〔の内二首〕 (山陽詩鈔卷五)

書幌沈々鎖夢月明務酒醒枕上

剔夢殘繁務鄰樓笑語人初定

錯認夢水聲務為夢雨聲務

幾股沙流蹙夢夕暉務樓々向万晚

捲夢簾幃務誰家鴨陣記夢栖処務

攪夢亂波紋務相喚歸

題画（山陽詩鈔卷五）

近遮夢林樹務遠遮万山誰道雲開

何肯閒獨有夢泉聲遮不慢住

故穿夢深處務作夢潺湲務

移万居築万園雜詠（より二首）（山陽詩鈔卷六）

家面夢東山務常眼明朝嵐夕翠

机間横吾儂怕万折夢看万山幅務

翻把夢琴書務移入万城

傍万墻種万桂養夢金葩務當万砌栽万蘭

護夢玉芽務更記山僧許夢斂送務

留夢將餘地務待夢梅華務

頼山陽詩六章 小竹七十老人書 篠崎弼印 承弼

本詩は「山陽詩鈔」に収載されている詩とほぼ一致するが、一部違う部分もある。参
考までに、各詩章の前に「山陽詩鈔」中の題と収載されている巻数を付した。

篠崎小竹 天明元年（一七八一）～嘉永四年（一八五二）

江戸時代の儒学者・漢詩人。名は弼、字は承弼、通称は長左衛門。小竹散人・畏堂・南豊・

轟江。父親は豊後出身の医師加藤周貞、大坂京町堀生まれ。九歳で篠崎三島に学び、十三

歳で養子になった。養父三島は管甘谷（荻生徂徠門人）に就き、私塾梅花社を開いた。

一時江戸に出、昌平学の古賀精里に入門、朱子学統を承けて帰坂後、梅花書屋を継ぐ。町

儒者に徹し、辺幅を飾らず育英に尽くした。その門人には有名人が多く見られる。（「輔仁姓名録」・「麗沢簿」当館所蔵「大阪府立図書館紀要第四号」に翻刻有）

詩と書を善くし、頼山陽と親しく、当館でも小竹の自筆に山陽・松陰等が朱批をいれた写本「小竹先生艸稿」、山陽が朱批をいれた「小竹先生自筆文稿本」等を所蔵している。

墓所：大阪天満東寺町天徳寺

頼山陽 らいざんやう 安永九年（一七八〇）～天保三年（一八三二）

江戸時代の儒学者。名は襄、字は子賛のち子成、通称久太郎、憐二・徳太郎と称したこともある。山陽は号。別号は三十六峰外史。広島藩儒頼春水しゅんすいの長子、母の静子（梅颯と号す）は大坂の儒医飯岡義斎の女。大坂江戸堀生まれ、父の広島藩儒医登用により、広島に移る。七歳頃から叔父杏坪の指導で素読を始め、九歳で学問所に入學、詩・書画も学ぶ。寛政九年叔父杏坪に従い一年程江戸に遊學、尾藤二州・服部栗齋に従學した。寛政一二年脱藩、享和三年（一八〇三）廃嫡となり、文化二年（一八〇五）門外自由となる。以後備後では菅茶山の廉塾の後を継ぎ、京都では私塾を開校し人材育成に努める傍ら執筆活動を続けた。門人には、後藤松陰・藤井竹外・森田節齋等の名がみられる。墓所：京都東山長樂寺

一 鶴沢探山筆「風俗十二ヶ月屏風」
つるさわたんざん

六曲一双（本体：一七〇×三七〇 絵：一三四×五五・五）

落款：法眼探山印



探幽系の月次風俗図（十二月図）の図様に基づく作品。各幅は千寿万歳（正月）・獅子舞（二月）・鶏合せ（三月）・春景（四月）・端午の印地打ち（五月）・氷室の節供（六月）・七夕の踊り（七月）・船遊び（八月）・重陽の菊酒（九月）・恵比寿講（十月）・御火焚（十一月）・煤払い（十二月）の十二の風景を描く。

京都国立博物館の谷文晁「久隅守景筆十二月屏風縮図」と図柄をほぼ同じくし、京都府立総合資料館蔵（京都文化博物館管理）の鶴沢探山筆「五節句図」（享保十二年）とも重なる部分がある。

鶴沢探山 年万治元年（一六五八）～享保十四年（一七二九）

江戸時代の狩野派画家。名は守見・良信・兼信。別号幽泉の可能性が高い。京都に生まれ、狩野探幽最晩年の弟子。探幽様式に熟練して法眼に叙せられる。元禄年間（一六八八）～一七〇四）探幽の弟子中から選ばれて上洛、禁裏御用絵師となり、探川改め探山と号し、鶴沢派を開く。享保十四年（一七二九）七月十三日、七十五歳没。墓所：京都二条川端の善

源寺。代表作に「鉄拐・山水図」(三腹対)がある。

『古画備考』の狩野探山の項には「元禄中、東山院勅宣ありて、探幽弟子中、秀逸可被召由にて、探川を上洛なさしむ。甚歡慮に叶。于今永く其家 禁中に奉仕、上洛後狩野探山と改、・・・と紹介されている。



< 七月 >

< 六月 >

< 五月 >

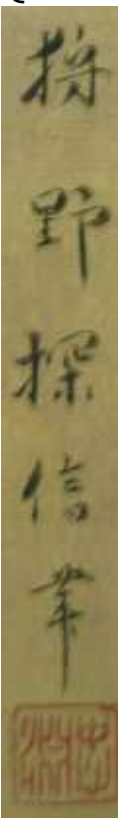
一 狩野探信かのうたんしん(守政)筆「山水図屏風」

六曲一双(本体:一七〇×三八五 絵:一一九×四八)

落款：「狩野探山筆」

忠淵方印

金地に夏景と冬景を墨で
えがいた作品。



狩野探信 享保三年一〇月（一七一八）没

江戸後期の画家。探幽守信の長男。初名仙千代、幼名図書。後守政又忠淵。号は探信、忠淵。画を父（探幽）に学び、山水人物をよくす。父の後を継ぎ幕府の絵師となり、法眼に叙せられ宮内卿と称す。鍛冶橋狩野第二世。享保三年十月十四日、六十六歳で死亡。墓所：池上本門寺中南院

『石亭画談』には、「探幽甚これを愛し、人探信に画を囑するものあれば、探幽潜在画を作り、探信をして款せしめ、以て囑者にあたふ。是探信の美名を欲する也」の一文がある。

二 片野家所蔵資料 軸三点書簡九通

平成二十年度、平野一郎様のご紹介により、東京在住の片野昭（故人）・みをご夫妻から中之島図書館に、家蔵の軸三点、書簡九通が寄贈された。現在整理中の資料であるが、屏風とあわせて紹介する事とした。寄贈者である片野昭氏は朝日新聞に勤務、停年後は「文化厚生事業団」の事務局長として社会福祉関係や文化イベントの世話役として活躍された。軸三点

一 内藤湖南書七絶幅 内藤湖南（虎次郎）書

一軸 五九（三七×一二一）

落款・「虎」炳卿等方印三種



「緑樹陰濃夏日長 樓臺倒影入池塘 水晶篇動微風起 滿架薔薇一院香 落款 虎」

内藤虎次郎 慶応二年（一八六六）～昭和九年（一九三四）

秋田生まれ、明治から昭和前期にかけての東洋史学者として大きな足跡を残した。字は炳卿（へいけい）、湖南、また黒頭尊者の別号がある。秋田県師範学校を卒業、はじめ国学を好みその蔵書により世に知られたが火災にあい消失、以後唐本の蒐集に志し、支那学を主とした。『大阪朝日新聞』『万朝報』などの記者として活躍後、草創期の京都帝国大学文科

大学の東洋史講座を担当した。博学の上に多才で詩文に長じ、書を善くした。その蒐集した善本は国宝を含み、没後杏雨書屋（武田科学振興財団 大阪市淀川区）に入った。

内藤虎次郎は当館と縁が深く、明治三十三年十一月二十九・三十日の「大阪朝日新聞」に、「図書館に就て（上 下）」の題で建設予定の府立図書館への期待をこめた記事が掲載（『内藤湖南全集 三巻』筑摩書房刊に収載）されている。

また、図書館発足当時、漢籍の収集方針に悩んだ今井貫一初代館長は、館長就任挨拶に朝日新聞社を訪れた際、読書会知名の大家であった同社の記者内藤湖南・西村天囚の両氏に逢い、漢籍の収集の要訣を尋ねた。その後今井館長が大手町の内藤氏宅を訪問した際、先生の書目答問を取り出し綿密に二二三の購入番号を朱書して審かに説示された等々、（『内藤湖南先生を憶ふ』『懐徳 十二号』所載）当館にとって忘れてはならない人物といえる。

尚 当館では、湖南自筆資料として『内藤湖南先生書七絶幅』（藤沢文庫九一―一六）一軸 藤沢桓夫氏旧蔵 を所蔵している。

一 永井（釈）瓢斎俳句画幅

一 軸 四五（一〇二×二八）

落款・「瓢斎」方印



親子とおもわれる人物図（彩色）に「たゞあるく事のうれしさ秋の晴れ」の句を付した作品。永井瓢斎の俳画作品『瓢斎俳画集』人文書院刊（を／＼四）には収載されていない。

釈瓢斎は本名永井栄蔵、大阪朝日新聞の記者、社会部記者、論説委員、特派員等を経て、昭和のはじめごろ（四年～十一年）に「天声人語」を担当。俳句を添えた「天声人語」は評判となった。「天声人語」は無署名であったが、初登場した明治三十七年頃の大阪朝日の論説担当は内藤湖南、西村天囚（天声人語の命名者）、鳥居素川、大正には長谷川如是閑が執筆している。

一 書翰九通

安田善次郎差出 片野重久あて 九月二五日 結婚祝添状

由良哲次差出 片野文吉あて 日付なし 西田先生の手紙について

狩野亨吉差出 片野文吉あて 一二日 訃報見舞い状

内藤虎次郎差出 片野文吉あて 五月二八日 訃報見舞い状

桑木敵翼差出 得能文あて 九年一〇月一七日 見舞い礼状

姉崎正治差出 得能文あて〔明治〕四二年四月八日 西田氏を囲む会合について

〔藤岡作太郎〕差出 得能文あて 二月一六日 近世絵画史（金湊堂刊）について

「拝復先日来御不快の由今では御全癒にや、や生も興津行以来大いに健康を誇り居候 當三日来風邪にかゝり閉口仕候 此頃八小説も何もよまらずグズグズ致し居候 近世絵画史まらぬながら不遠刊行致度と存候處 彼此はかどらす標本の写真を入れるにつきては権貴富憂に頼みあるかざるべからず これにはホツと致候 博覽會の折は古社寺宝物の展覧もあるべく 其節八西下致度存候が四五月頃八六かしかるべく せめて七月あたりはと存し世に御座候 當浦嶋もし市上に得心上は御送り可申上候 此日別書もせず面白き噂も聞かず何となく懶しく候間これにて閣筆置ゐて可申上候 頓首

三月十六日 作太郎

得能様」

『近世絵画史』（九二一／十七）は、明治三十六年五月の序文、六月の印刷・発行となっている。画家索引を付すなど、時間を要したであろうと推測されるが、この書簡によっても、使用する図版なども含めなかなかなかどらなかつた様子が窺える。

芥川龍之介差出 得能〔文〕あて 九月六日 人物（菅忠雄）紹介状

波多野精一差出 得能文あて 〔二年〕九月二日 白松氏の翻訳について

「拝啓お手紙拝見致候 御申越の如くば事全く原著者自身の誤解より出でたる事故白松氏も貴下に対して感情を害するなどの事はなかるべしと存候殊に同氏の翻訳は未さほど進行せし様子にも無之候へば御懸念にも及ぶまじきか兎角感情の行違ひなどの無きやう及ばず

なから力を添へ申有べく候。敬具

九月十一日 波多野精一

得能文様」

加藤弘之翁差出 得能文あて 二月二十八日 一軸 五五(一八×四七)

片野文吉は片野昭氏の父、

片野重久は片野昭氏の祖父、

得能文は昭氏の母方の祖父、一八六六年～一九四五年 哲学者 文学博士 東大卒業

参考文献

大日本書画名家大鑑 荒木矩編 大日本書画名家大鑑刊行会 一九三四年刊(七二二／一五五N)

和漢美術鑑定全書 刊(九〇八／七八)

「増訂古画備考」十三・十四卷 朝日興禎著 弘文館 明治三六年刊(九二一／五八)

石亭画談(続日本随筆大成 九卷) 森銑仙三編 吉川弘文館(〇四一／七二)

扶桑画人伝 二巻 古筆了仲著 坂昌員著 (三五二／一二〇)(朝日九二／一)

近世京都の狩野派展 京都文化博物館学芸課編 京都文化博物館 平成十六年刊(七二二、四／三二N)

谷文晁「古図縮臨」狩野博幸著(日本美術工芸 五百九号)日本美術工芸社 一九八一刊(雑一三四五)

山陽詩鈔 頼山陽著 (二三七・四／五四八)(二三七・四／一〇六)

「図書館に就て」(内藤湖南全集三巻) 内藤虎次郎著 筑摩書房 一九七一刊(三三〇／三四七)

「内藤湖南先生を憶ふ」(懷徳十二号) 懷徳堂記念会編・刊 一九三四年(雑八一七)

朝日新聞社史 朝日新聞百年史編集委員会編 朝日新聞社 一九九〇 九五年刊
文化人名録 昭和二十七年版 日本著作権協議会編刊

国史大辭典 国史大辭典編集委員会編 吉川弘文館 一九五二刊

日本古典文学大辭典 日本古典文学大辭典編集委員会編 岩波書店 一九八五年刊